何とも不思議―テレパシー

テレパシーは「言語その他感覚手段に依らずに、ある人の精神から他の人の精神に思考・観念・感覚などの印象が伝達されること」（広辞苑）。私たちがふだん使う「虫の知らせ」は「何の根拠もないが、何か悪いことが起きそうな不安」（同）。正式には違うが、大体同じ意味に使っているかもしれない。志賀直哉作「焚火」がテレパシー現象を取り上げているが、これを読むと何とも不思議という他はない。

志賀直哉全集

作家は、32歳の大正4 年、群馬県の赤城山近くに山小屋を作り、5 月から9 月まで住んだ。作品は、その時に聞いた話をもとにしていて、実際に起きた不思議な事柄といってよい。

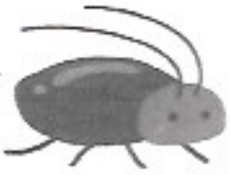
作家夫妻は小屋が出来上がるまで近くの旅館に滞在していた。雨があがった夜、夕食を済ませた夫妻は、滞在客の画家S と宿の主人K と4 人で夜の散策に出た。そして湖のそばで焚き火をした。火に当たりながら、話題は、この世に不思議なことがあるかどうか、といったことになった。画家S がK さんにむかって「去年、君が雪で困ったときの話なんか不思議と言っていいんじゃないか」。夫妻が聞いていないというので、K さんが話し始めた。

自宅まで12キロの雪山の踏破は辛かった

去年、雪が1 メートル近く積もったころ、東京に住む姉さんの病気が悪いという知らせを受けて、K さんは山を下った。だが、姉さんの病気はたいしたことがなくて3 晩泊まって予定より早く自宅に向かった。自宅は鳥居峠を越えた麓にある。水沼というところに着いたのが午後3 時で、当初の計画ではここに一泊して翌日鳥居峠を越える心算だった。

自宅までは峠越えで12キロ。「何とかなる」とK さんは予定を変えて強行することにした。日暮れには二の鳥居まできた。気力、体力十分な上、月も出ていた。K さんは登り始めた。雪はどんどん深くなり、山を下りたときの倍の深さになっていた。雪は柔らかく腰まで埋まってしまう。あたりは一面の雪で、踏み跡もなく、道が分からない。地元育ちのK さんもだんだん参ってきた。

夏なら森があるのでこんもりしているが、冬は葉がないので頂上が近く見える。だがなかなか届かない。K さんはもう一息、もう一息と登った。恐怖も不安を感じなかったが、気持ちが少しぼんやりしてきた。「こういうときが危ないのです。雪で死ぬ人は大概そうなって眠って死んでしまうのです」とK さん。


「虫の知らせ」は不思議現象

K さんはそれでも頑張って2 時間ほどで峠の頂上に着いた。雪はますます深い。ただこれからは下りになる。時計を見ると午前1 時を過ぎていた。遠くの方に提灯が2 つほど見えた。今時分何だろう、とK さんは不思議に思った。でもすれ違いにしろ人と会うのは嬉しい。K さんは勇気を振るい起こして下って行った。そして覚満淵の辺で提灯の一行と行き会った。

その人たちはK さんの義理の兄と、K さんの家に泊まっている湖の氷切り人夫3 人だった。兄が「お帰りなさい。大変でしたろう」と言った。「今時分どこへ行くんですか」とK 。「今、お母さんに起こされて迎えにきたんですよ」と兄は何の不思議もなさそうに答えた。K はぞっとした。

志賀直哉
（1883年（明治16年～1971(昭和46年）

「私がその日に帰ることは知らせてなかったんです。後で聞くと、母が私の子供を抱いて寝ていましたが、不意に兄を起こして、K が帰ってきたから迎えに行って下さい。K が呼んでいるから、と言ったそうです。あんまりはっきりしているので兄も不思議に思わず、人夫を起こし、支度させて出てきたんです。よく聞いてみると、K が呼んでいると母が言ったのは、丁度私が一番弱って気持ちが少しぼんやりしたときなんです。」

「K さんが呼んだの」と妻。K が「峠の向こうじゃいくら呼んでも聞こえません」「そうね」と妻は涙ぐんでいた。「そんな気がしたというくらいでは、この真冬の夜中に外出できるものではありません。ゲートル一つ巻くのでも一度解けたら凍って棒になってしまいますから、支度が大変です。その間お母さんは湯を沸かしたり、おむすびを握っていました。」

Kさんの父は悪い人ではなかったが、妾を囲い、時々きては旅館の売り上げをさらっていった。そんなことでK さんは父と衝突し、母思いになり、母のほうもK さんを強く愛していた。この通じ合う心がテレパシーの背景かもしれない。

戦前、私の母は「チチシス」の電報を受け取り、私たちにご飯をよそいながら「めずらしく父の夢をみた」と涙声で語ったのを思い出す。これは虫の知らせのほうだろうか。世の中には不思議なことが必ずあるものだ。（小林）